

月刊 ウィーン

GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊34年目 **Nr. 398**

2023年3月号



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都

131

「原子力人材育成ネットワーク」(産業界、大学・高専、行政機関、地方自治体等からなる原子力人材育成のプラットフォーム)の二〇二二年度シンポジウムが二月四日、都内で開催された(同ネットワーク主催、オンライン併用)。一年間の活動成果を報告するとともに、原子力人材育成に資するデータ収集・分析など、三つのテーマを設け議論した。次世代人材育成のテーマでは学校教科書の原子力や放射線に関する記述についても取り上げられた。

同ネットワークの運営委員長を務める日本原子力産業協会の新井史朗理事長は、開会に際して挨拶。先に閣議決定された「GX(グリーン・トランスフォーメーション)実現に向けた基本方針」の中で、「エネルギー安全確保に寄与し、脱炭素効果の高い電源として、再生可能エネルギー」とともに、原子力を最大限活用する」方針が示されたこと而言及し、「原子力に関わる人材育成の課題解決に向けて、共通の思いを新たにしていこう」と述べたほか、「機関連断的な活動の成果が一層実りあるものとなって欲しい」と、有意義な議論を期待した。

原子力人材育成に資するデータ収集・分析に際し、日本原子力文化財団は、毎年実施している「原子力に関する世論調査」(全国一五〜七九歳の男女対象)について紹介。直近の二〇二二年度調査



から、「若年層は他の年代より、今後の原子力発電の利用に対する肯定意見の割合が多い」との分析結果を示した。また、次世代人材育成のテーマでは、日本原子力学会教科書調査ワーキンググループを主軸とする筆者が小中高校の教科書のエネルギー、環境、原子力、放射線に関する記述の充実化に向けた調査結果を説明。同調査では、教科書改訂などの時宜をとらえ、対象学年・教科は調査年次により異なるが、一九九六年以降、これまでに一七件の報告書を発表し、文部科学省、教科書出版会社などに提言を行ってきた。例えば、昨夏、報告書が発表された二〇二二年度使用開始の高校教科書を対象とした調査は、地理歴史、公民、理科、保健体育

家庭、工業について、計一科目・七二冊の教科書を対象に実施。新設された「公共」(公民の二科目)に関連し、社会系の教科書について、再生可能エネルギーのメリット・デメリットや、エネルギー供給の安定性、安全性、環境への影響にも言及するよう提言。また、原子力エネルギー利用についての学びに際し、「考えるべき視点が様々かつ一教科の学びで完結しない」、「それゆえに、新学習指導要領が掲げる『主体的対話的で深い学び』を展開できる」とした上で、調べ学習、ディベート、観察・実験を採り入れるなど、教科横断的な関連を理解させる工夫を要望している。筆者は、同ワーキンググループの報告書がメディアで取り上げられた事例も紹介。今後の活動として、「現場の先生方、教科書会社で執筆している担当者と直接の意見交換も行いたい」と述べた。

最後に、近畿大学の若林源一郎教授より、同大学が所有する原子炉を用いた中等教育へのアウトリーチ活動として、理科教員向けや中学生、高校生を対象とした原子炉実験研修会について説明があった。最近の中学生や高校生には良く出来たAIおたくが少なくないことがユーモアを交えて紹介された。

大井川宏之日本原子力研究開発機構理事による閉会の挨拶では、GXで原子力を取り巻く状況が大きく変わる可能性があり、人材育成とサステナビリティはそれを支える両輪であることから、産官学が一体となって取り組むことの重要性が強調された。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市に關係する偉大な神経学者を紹介したい。ジークムント・フロイトは、一八五六年にオーストリア帝国のライベック(現チエコ・ブジーボル)でユダヤ人毛織物商人の息子として生まれた。七三年にウィーン大学に入学、二年間物理などを学び、医学部のエルンスト・ブリュッケの生理学研究所に入り、両生類・魚類の脊髄神経細胞を研究した。八一年にウィーン大学を卒業後、八五年パリへ留学し、神経学者、シヤン・マルタン・シヤルコーのもとで催眠によるヒステリー症状の治療法を学び、翌年ウィーンへ帰り、この治療法を一般開業医として実践。治療技法にさまざまな改良を加え、最終的に自由連想法にたどりつき、この治療法を精神分析と名づけた。その後、フロイトは、ヒステリーの原因は幼少期に受けた性的虐待の結果であるという病因論ならびに精神病理を発表。今日の心的外傷の概念に通じるもの。これに基づいて彼は、ヒステリー患者が無意識に封印した内容を、身体症状として表出するのではなく、回想し言語化して表出することができれば、症状は消失する除反応という治療法にたどりつく。やがて彼の関心は心的外傷から無意識そのものへと移り、精神分析は無意識に関する科学として方向付けられた。そして、自我・エス・超自我からなる構造論と神経症論を確立させた。当時、ユダヤ人は大学で教職を持ち、研究者となるのが困難だったの

で、フロイトも市井の開業医として生計を立てつつ研究に勤しんだ。スイスのユングは協力者として暫く親交があったが、後に袂を分かつたことになった。フロイトは、人間の心の無意識という世界を発見したことによって、マルクス、ダーウィンとならんで二〇世紀の思想に大きな影響を与えた人物の一人とされている。

一方、一九二八年に兵庫県多紀郡篠山町(現・丹波篠山市)に生まれた河合隼雄は、旧制神戸工業専門学校を経て、五二年京都大学理学部数学科を卒業。兄の雅雄がフロイトの「夢判断」を読んで「すごいショックを受け、夜眠れなかった」と言つと、「ショックなんか受けなかった。こんな面白い本はないと思う」と答えた。京都大学大学院に籍を置き、心理学を学びつつ数学の高校教諭として三年間勤務。ロールシャッハテストが彼の心理学の土台を築く上で大きな役割を果たした。五九年にフルブライト奨学生としてカリフォルニア大学ロサンゼルス校へ留学し、クロツパーやシュピーゲルマンの指導を受けた。留学期間が切れた後も助手として採用された。クロツパーは河合にスイスのユング研究所への留学を勧めた。六二年に天理大学で助教になった後、六二年〜六五年までユング研究所で日本人として初めてユング派分析家の資格を得る。帰国後、七二年〜九二年まで京都大学教育学部で助教教授として教鞭を執る。河合は、欧米で修めた心理学を日本では同様に適用できないことに気づき、日本の環境や日本の心性にあった心理療法を工夫して創ることに苦心したという。

著書『ユング心理学と仏教』は、河合による日本人の深層心理研究の到達点にして、同人の著作の一つの頂点ともされている。ここで語られる日本人に典型的な治療過程が、確固たる「自我」を出発点とする精神分析学とは逆方向の志向性を持つているとの指摘もある。また、箱庭療法を日本へ初めて導入。臨床心理学・分析心理学の立場から八八年に日本臨床心理士資格認定協会を設立し、臨床心理士の資格整備にも貢献。二〇〇〇年に文化功労者を受章した。「視野を広げるために」一番大事なのは、「道草、ゆとり、遊び」との名言がある。余談であるが、原子力人材育成ネットワークが設立された二〇一〇年一月に筆者は初代の事務局長を務めた。フロイトの膨大な著作には目を通したことはないが、無意識の重要性は理解しているつもりである。

河合教授の名言は教育にとって含蓄が深いと思う。今月も両市に関連する偉大な神経学者を紹介することができた幸運に感謝しつつ、ウィーン大学が所蔵するフロイトの写真を掲載させていただく。

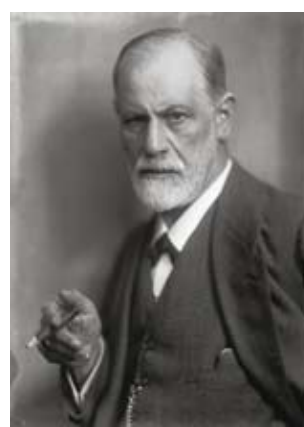
■ 杉本純 元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長



ウィーン9区にある記念像



ウィーン9区にあるジークムント・フロイト博物館と所蔵写真



ウィーン大学にある記念碑